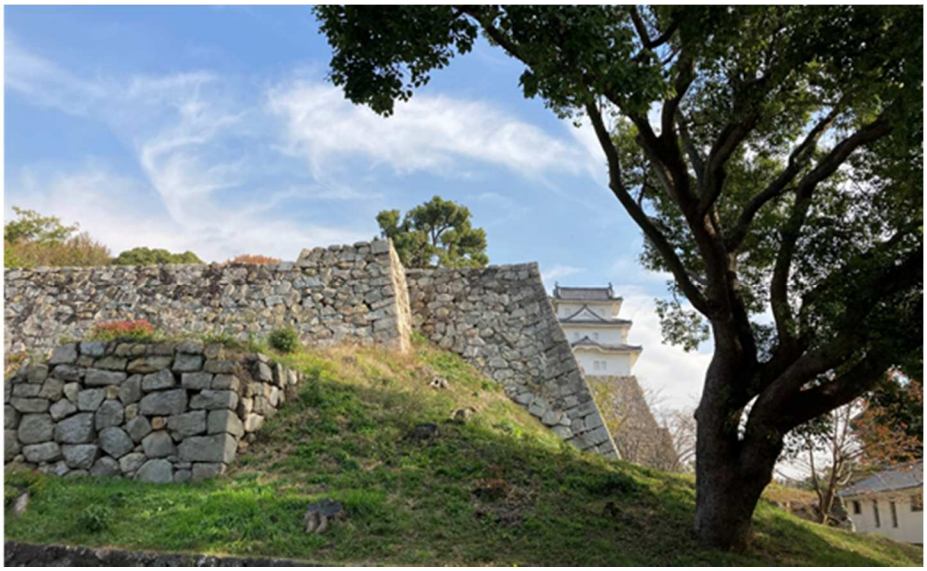
明石の史跡（３９）明石武家屋敷の犬



山陽電鉄明石駅周辺の立体交差にともなう、武家屋敷跡の発掘調査によると、近世（１７世紀前半以降）における武士階級の食生活（肉食）の一端が、明確にされたことである。とりわけ犬に関しては、明らかに解体・調理した痕跡の明白なものが多く、ことに側頭骨に穴をあけて、脳髄を摘出したと考えられるものまで報告されている（明石城武家屋敷跡／兵庫県文化財調査報告１０９．１３２頁。この項は山下俊郎氏の御示教による）。

永禄５年（１５６２）来日し、信長・秀吉にも謁見し、慶長元年（１５９６）長崎で没（６５歳）したルイス・フロイスは、豊かな知見をもとに、天正１３年（１５８５）執筆した著書のなかにおいて、「われわれは犬は食べないで、牛をたべる。彼らは牛を食べず、家庭薬として見事に犬を食べる。」（ヨーロッパ文化と日本文化／岩波文庫１０２頁）とあって、犬を食することが、すくなくとも武士階級においては、なんら不思議ではなかったことを示唆する。

元禄３年（１６９０）３月、明石藩三木郡小川組大庄屋安福武重は、「天下一同ニ犬之義大切ニ被遊、国々在々迄御憐被　仰出候事」と記録しており（累年覚書集要１４頁）、犬食の習慣にブレーキがかかつたことはいうまでもない。これに追い討ちをかけるように、享保の末頃より、駿河・遠江あたりでは、病気を持った犬に噛まれると、まるで犬のごとくに狂い死にすることが伝わり（煙霞**臾**談／広文庫２．１０３１頁）、食生活の幅が狭められたことであろう。調理方法については、不詳というほかないけれども、薩摩での「えのころ飯」（子犬の腹中の臓物を取り出し、かわりに米をいれて針金でくくり、竈の火で焼く）も選択肢のひとつでは----と考えている（一話一言補遺／広文庫２．１０４０－１頁）。

日本歴史学会会員　茨木　一成